

梵舜本『沙石集』の性格

一、はじめに

無住道暎一円が著した『沙石集』には、多くの異本が現存している。『沙石集』の異本成立の主な要素としては、①草稿本的な面影を残す「不慮二披露」された草案の存在、②最初に公にされた弘安六年本の存在、③無住自身による数度の改稿、④後世の享受の過程における改変等が挙げられる。渡邊綱也氏等の研究^②により、現在では『沙石集』本文系統は古態に近い本文を有しているとされる古本系統（広本系統）と、改稿後の本文を有しているとされる流布本系統（略本系統）とに大別されている。さらに、古本系統では十卷十二冊の十二帖本と十帖本、流布本系統では十帖本と五帖本とに分類できる。

『沙石集』諸本関係については、先に述べた成立要素によって

梵舜本『沙石集』の性格

加 美 甲 多

『沙石集』諸本が複雑な本文内容を有していること等の理由から、現在まであまり論じてこられなかったと言える。その中で、『沙石集』諸本関係について最初に言及されたのは、渡邊綱也氏である。渡邊氏は「沙石集諸本のおぼえ書―主として拾帖本と拾二帖本との関係についての推論―」^③において詳細な諸本分類を行われた。そして、その考えをより明確にされたのは、日本古典文学大系『沙石集』「解説」^④である。渡邊氏は「流布本系の諸本には全く欠け、十二帖本にも略述もしくは欠けている所、教説・法語に適しない卑俗な説話を多数収録している」を含めた四項目の理由から、梵舜本を「無住がしばしば述べている「草案」のまま洛陽に披露した書の面影を、伝えたもの」であると規定されている。その上で別の八項目の理由を挙げられ、十二帖本を「不意二」披露された草案に、無住自身が手を加えて、最初に公けにした書の形」とされている。

つまり、渡邊氏は十帖本梵舜本「草案」↓十二帖本系統↓流布本系統へと『沙石集』移行段階を推測されている。

近年まで渡邊氏の梵舜本「草案」説に対する異論は見られなかったが、渡邊氏の梵舜本「草案」説とは異なる見解が、土屋有里子氏によって打ち出された。^⑤これは新編日本古典文学全集『沙石集』^⑥において、小島孝之氏が「梵舜本が本文的には古本系統の諸本よりも流布本系統に近い本文を持つている点から考えると、古本から流布本が成立してくる途中のある段階で、こうした説経説話が多量に増補されたテキストだったと考えることも可能である」と述べられたことを受けて、考察されたものである。具体的には、梵舜本と米沢本との巻第四・巻第八の題目配列比較や『宗鏡録』と梵舜本との整合性、梵舜本巻第八の識語等から梵舜本全体の記述の整合性を説かれ、梵舜本は『沙石集』草稿本ではなく、米沢本の完成後に創りだされたものであるという見方をされている。

以上の様に、小島氏、土屋氏を除くと、現在まで『沙石集』草稿本についての見解は、梵舜本が草稿本であるという説が大勢を占めてきたと言える。本稿では、梵舜本を『沙石集』草稿本（第一次段階）として規定して良いのか、という点を含めて梵舜本『沙石集』の持つ性格について検討してみたい。

一、梵舜本『沙石集』と諸本

1、後半部

始めに梵舜本を中心とした『沙石集』諸本の巻第六から巻第十本（後半部）の本文内容の異同について見ていきたい。『沙石集』巻第一から巻第五末（前半部）ではなく、後半部から考察を行うのは、特に『沙石集』後半部には古本・流布本系統間で著しい本文内容の相違が認められ、梵舜本は古本系統に属する諸本の中においても後半部に非常に特異な本文内容が認められるからである。また、梵舜本が古本系統に属しているとされるのも梵舜本後半部の本文内容に依る所が大きいのである。つまり梵舜本の性格を明らかにするには、梵舜本後半部の本文内容に見られる特質を見極めることが必要不可欠なのである。

そこで、古本系統の梵舜本^⑦と米沢本^⑧、流布本系統の慶長十年古活字本（以下、慶長十年本^⑨）における『沙石集』後半部における本文内容の相違について調べた。繰り返し表現や見聞強調表現、教理的叙述、話末評語、名詞その他に絞って分類を試みた。^⑩『沙石集』後半部における本文内容の相違を見ると、梵舜本は「ヨクく」といった繰り返し表現や「コノ事ハ、其座ニテ聞タル聖ノ物語ナリ」といった見聞強調表現、そして人名等の固有名詞が多く見られるので

高い数値となり、逆に米沢本はそういった記述の多くが省略されており全般的に低い数値であった^⑩。また、諸本の一致傾向を調べると、梵舜本と慶長十年本との一致箇所が百八箇所認められるのに対して、米沢本と慶長十年本とが三十九箇所的一致に止まっていた。梵舜本後半部に認められる傾向は次の様になる。Ⅰ、梵舜本は、同じ古本系統の米沢本との一致箇所は少なく、流布本系統の慶長十年本の一一致箇所は極端に多くなる。同時に米沢本と慶長十年本との一致率は低い。Ⅱ、梵舜本は、三本の伝本の中で数値的には最も記述の付加が認められる伝本である。Ⅲ、同じ古本系統である梵舜本と米沢本の同一説話内では、数値的に大きな相違が見られ、特に人名や地名等においては梵舜本に多く付加が認められる。

以上を踏まえた上で、具体的且つ顕著な用例を挙げながら、梵舜本後半部の本文内容がどういった意味を持つのか、について考えていく。なお、本文内容の比較に当たっては、梵舜本、米沢本、慶長十年本の他に、古本系統の俊海本^⑫、元応本^⑬、藤井本^⑭、流布本系統の内閣文庫本^⑮、貞享本^⑯を適宜用いた。

梵舜本巻第六(九)では次の様な記述が見られる。

マメヤカニ打歎テ、泣々申ケレバ、「実ニイミジク思給ヘリ。

これは榮朝上人が説法をした時、その場にいた山伏を指し、山伏の中途半端さをあらゆる喩えを示して非難した後の記述の一部であ

梵舜本『沙石集』の性格

る。具体的には、その説法に「感アリケル」山伏が「御説戒承候ヘバ、ゲニモスル形、仏法ニアウニモ覚ヘ侍ラズ。イカゞ仕ルベキト、マメヤカニ打歎テ、泣々申」したので、榮朝上人はこの山伏を侍者にしたという話であるが、梵舜本に見られる「泣々」という表現が効果的に用いられている。山伏は榮朝上人の説戒に心の底から感動したからこそ、「マメヤカニ打歎」くのである。その山伏の真剣さをより自然な形で描いているのは「泣々申ケレバ」である。他の古本系統(米沢本、元応本)では「マメヤカニ打歎テ申ケレハ」となっており「泣々」という状態には至っていない。この山伏の態度を受け、梵舜本では、榮朝上人は「実ニイミジク思給ヘリ。サラバ侍者ニナリテ、当寺ニ井給ヘカシ」と返答するのである。この「実ニイミジク思給ヘリ」という山伏に対する榮朝上人の感動を表わす言葉は、他の古本系統のみならず流布本系統(内閣文庫本、慶長十年本、貞享本)にも見られない。つまり、「泣々」(山伏)から「イミジク思給」(榮朝上人)というそれぞれの感情の推移は梵舜本独自の付加なのである。山伏が「泣々」申し上げたからこそ、榮朝上人はその様子を「実ニイミジク思」って山伏を侍者にしたとする記述は、読者により強い感動を呼び起こすことができるのである。こういった記述は、読者を話の中に強く引き入れる為の道具なのである。次に、人名等の記述の異同を概観すると、梵舜本や流布本系統は

説話自体の整合性を保とうとする記述が非常に目立つ。例えば、巻第六（二〇）に登場する「戴淵」は確かに「海賊」であり、巻第七（二五）の「去寛元年中事」とする記述はいかにも実際に起こった出来事であると読者に印象づける効果を持つ。

卷六一〇

昔漢朝ニ戴淵ト云ケル海賊モ、大臣ノ船ニ乗ジテスゲケルヲ、
 （梵舜本、内閣文庫本、慶長十年本、貞享本）

昔漢朝ニ戴淵ト云ケル賊モ、或時大臣ノ船ニ乗テ過ケルヲ、
 （米沢本、元応本）

卷七一五

畜類モ心アル事 去寛元年中事也（梵舜本、内閣文庫本、慶長十年本、貞享本）

畜類モ心アル事（米沢本、元応本、藤井本）

梵舜本には、「白楊ノ順禪師」（巻第八（一一））や「慈明ト云シ禪師」（巻第八（二二））、「菊河」（巻第九（一一））、俊海本も同様）といった人名、地名に加えて、「烏帽子ヲダニモ用意シテ」（巻第八（二二））等の説話内容に即した独自の記述の付加も見られる。この様に、梵舜本後半部は非常に細かな記述が施されており、それらが存在することによって他本よりも本文内容が理解しやすくなっている。『沙石集』後半部において梵舜本は詳細且つ実録的な本文内容を有

していると見える。

以上により、他本と比して梵舜本は、より説得力が増した本文内容、より具体性を持った本文内容、より詳細且つ実録的な本文内容を有しているのである。その点では『沙石集』諸本の中でも梵舜本は特異な本文内容であると言える。そして従来、梵舜本後半部は古本系統に属するとされてきたが、その本文内容は古本系統の米沢本との類似性は弱く、慶長十年本の流布本系統と強く類似していた。従って、梵舜本後半部から梵舜本を草稿本と考えると、梵舜本↓米沢本（記述大幅削除）↓流布本系統（再び記述増補）となる。梵舜本は『沙石集』草稿本とは言い難く、むしろ流布本系統に近い本文内容を有していると言える。

2、前半部

『沙石集』諸本の中で、巻第六以降の著しい本文内容の相違に比べ、古本・流布本系統間本文に大きな異同はあまり認められない。『沙石集』前半部においても、後半部と同様の傾向が認められる調査結果となった^⑩。梵舜本と慶長十年本との用例数が非常に類似しており、全体的に米沢本の用例数が低い数値を示している。また、梵舜本と慶長十年本との一致箇所は百十四箇所認められるのに対して、米沢本と慶長十年本は二十二箇所的一致に止まっていた。次に前半部における本文内容の相違の例を挙げる。

卷一七

南都二永超僧都トイフ学生有ケリ。(梵舜本)

南都ニ学生アリケリ、(米沢本、元応本、内閣文庫本、慶長十年本、貞享本)

卷二一

少シ遠行テ、山ノ麓ヲ尋ル程ニ、(梵舜本)

山ノフモトヲ尋ケル程ニ、(米沢本、元応本、内閣文庫本、慶長十年本、貞享本)

梵舜本の本文内容に対する姿勢は前半部においても変わらないことがわかる。例えば、巻第二(一)では、近くに「藤ノコブ」がなかったという記述を受け、「少し遠くへ行くことにした」、それが「山ノ麓」ということになるのである。この様に梵舜本は、説話の細部を意識し、説話がより自然な形で展開できる様に工夫された記述を常に心掛けている。

他本に比べ梵舜本『沙石集』前半部は、後半部と同様に事実性や具体性を持った多彩且つ詳細な本文内容を有し、そういった記述が本文内容への理解を強めさせている。同時に、それが読者に説話への興味を強め、説得力を持たせる作用を生じさせていくのである。これが梵舜本本文の一つの特性と言える。また、梵舜本が草稿本であるならば古本系統から流布本系統への移行の中で、一度その多く

が削除され、再び増補されたという不自然な改稿過程を辿ることとなり、やはり諸本含めた『沙石集』前半部、後半部からは梵舜本が草稿本とは言い難い。

次に問題としていた梵舜本、米沢本、慶長十年本(流布本系統)における本文関係を考えたい。梵舜本と慶長十年本との一致度の高さを考えると、両本の本文内容の類似は明らかである。従って、確かに渡邊氏らが言われてきた通り、梵舜本前半部は流布本系統と類似している。しかし、前半部の同一説話内に限っても、十六の用例が梵舜本のみ認められ、梵舜本の方が流布本系統よりもさらに記述が詳細である部分が存在しているのである。梵舜本は、同じ古本系統の米沢本と比して圧倒的に記述が詳細であり、それは流布本系統をも超える数値なのである。逆に米沢本は流布本系統から遠い本文内容を有していることも言える。即ちこれは、米沢本が草稿本である可能性を示すものである。

三、無住笑話

梵舜本は、巻第一から第五末の前半部、巻第六から第十本の後半部共に古本系統よりも流布本系統に近い本文を有し、さらにその本文は流布本系統よりも詳細である部分が多く認められることについては、二で述べた通りである。そして、米沢本を『沙石集』の草稿

本（に近いもの）として考える時、次の疑問点として浮かんでくるのは、古本系統から流布本系統への無住自身の改稿作業の中に梵舜本を置くことができるのか、という点である。つまり、『沙石集』は古本系統から流布本系統への流れがあり、流布本系統には笑話部分や笑いの要素の多くが削除されていることが明確な中で、笑話を含めた現在の梵舜本本文、特に後半部を無住自身の改稿の一環とするのか、後世の享受の過程における改変によって生じたとするのか、という判断である。この点に関して、土屋氏は、梵舜本が後世の享受の過程による改変ではなく、無住の改稿作業におけるものと述べられた。それでは土屋氏の述べられる様に、諸本の中で非常に特異な本文内容を持つ梵舜本後半部も無住の改稿の一環として生じた伝本と考えて良いのだろうか。この点に大きな疑問を持つ。流布本系統の本文内容からも判断できる様に、『沙石集』の改稿作業における大きな変化は仏教説話や教理的叙述の増加なのである。そうした無住の改稿作業の過程で、果たして梵舜本後半部の様な内容のものを創作するだろうか。

この問題を考える時に、一つの重要な手掛かりとして、無住笑話が挙げられる。『沙石集』は諸本の共通項として笑話が採られていることが特徴なのであるが、特に梵舜本独自笑話は非常に多く認められ、数々の研究において注目されてきたことから典型的な無住

笑話の特徴と比較することに有効性を持つと考ええる。

1、話末評語

笑話一話、一話に対する無住の認識を話末評語として捉え、無住が笑話を掲載した意図の一つの判断基準として梵舜本の記述と米沢本や流布本系統、そして無住最晩年の作品である『雑談集』の記述とを比較すれば一定の傾向を見出せる可能性が存在している。そこで、最初に梵舜本後半部の独自笑話での話末評語と判断できる部分を挙げ、その傾向について考えたい。

梵舜本後半部の独自笑話での話末評語（巻第八は江戸初期本とも共通する笑話）

- ・目クチハダカリテ、芋ノ茎ナレドモ、随喜ノ心モ、ヲコラザリケリ。（巻第六（四））
- ・ハカリナキ煩ニテ、大鼓ユヘニヤ。其子息ノ僧ヲバミ侍キ。慥ノ事ナリ。（巻第六（四））
- ・是ハスコシノタガヒナレドモ、ヲカシクコソ。（巻第八（九））
- ・アマリニ風情過テ、却テヲカシクゾ思ケル。（巻第八（一））

梵舜本後半部の独自笑話での話末評語の関心は、説法や日常の場での笑いからその感想という極めて明確な構成で成り立っている。

卷第六においては説法に関する感想に笑いを意識した評語が見られる。例えば、多大な布施を期待していた説教師が実際に布施を見ると多量の干した「芋ノ莖」であったことに驚き「目クチハダカ」つた話では、「随喜ノ心」も起こらないと「随喜」と「芋莖」とを掛けた駄洒落を評語に加えている。また、礼盤がなかったので「古キ大鼓」を高座にした説教師が説法中に太鼓の皮が破れ落ちてしまう話では、それを評して「(太鼓の)バチ」と「罰」とを掛けて「大鼓ユヘニヤ」と述べられる。これも話末評語に駄洒落が織り込まれている。卷第八においても卷第六と同様に教理的叙述は付加されず、話末評語によって笑話を仏教的な側面に持つていくという行為は行われていない。

これに対して、『沙石集』他本後半部や無住他作品における笑話での話末評語の関心はどうであろうか。次に流布本系統笑話、米沢本独自笑話、『雑談集』^⑨笑話での話末評語において特徴的なものを一例ずつ挙げた。

流布本系統後半部の笑話での話末評語（現存諸本において共通する笑話）

- ・此尼公興懐ニシタリケルニヤ。又アシク心エタリケルニヤ。
仏法モ詞ヲアシク心ヘツレバ邪法ニナル。（以下教理的叙述）
（卷第六（一六））

梵舜本『沙石集』の性格

米沢本後半部の独自笑話での話末評語（卷第八は元応本、藤井本とも共通する笑話）

- ・衆生妄想ノ無我ノ中ニ我ヲ解スルコロニ似タリ、（卷第八（二二））

『雑談集』笑話での話末評語

- ・如^レ此無明ノ鬼ナリト思ヘドモ、菩提ノアカツキニナリヌレバ、真如実相一ツ也。故ニ無明ノ夜晴ル、可^レ思也。（第四卷第七）

梵舜本、米沢本共通笑話の話末評語に感想と考えられるものが一部存在しているが、諸本共通笑話、米沢本独自笑話、『雑談集』笑話を貫く無住の話末評語の共通性としては仏教的価値判断が先にあり、寓話として笑話を載せていることがその傾向として考えられる。

『雑談集』を含め、これらの評語全てが無住のものではなく、後世の享受の過程における付加とは考え難い。そうであるとすると、無住の評語と考えられる部分は常に仏教を意識したものであり、それをわかりやすく示す為に笑話を挙げるといった形であると言える。

例えば、卷第六（一六）では酒に水を入れて売ることを禁じられた尼公が、水に酒を入れて売ったという笑話の話末評語である。「興懐」や「アシク」等の感想と考えられる評語も存在するが、重要なのはその後にくく叙述である。「仏法モ詞ヲアシク心ヘツレバ邪法

ニナル」として、以下「真言ノ法」等の教理的叙述が展開される。中心は「仏法モ」以下の説明にあり、笑話は仏教的思想の意味や意義をわかりやすく述べていく為の導入的例示として用いられている。下線部からもわかるように、無住笑話は仏教的な戒めや警句をより身近に感じさせる為の喩えなのである。そして、この姿勢は『沙石集』前半部においては、梵舜本を含めた諸本で一致した態度なのである。

つまり無住笑話の話末評語は、読者に教理的叙述を明示することによって、あくまで仏教説話の枠内に収まるものになるのである。それに対して、梵舜本後半部の独自笑話での話末評語は明らかに評語の関心が異なっており、他本の様な仏教の為の教理的叙述は展開されない。それは無住の他の著作における笑話を照らし合わせてみても特異な評語であることがわかる。例えば、『雑談集』第四巻第六では次の様な話末評語が見られる。

諸人ノキ、ヲアドロカス。是即十悪ノイタス所也。能々慚愧シテ、念仏ヲ可唱云云。

これは同じ無住著作の『雑談集』笑話の話末評語が、梵舜本笑話の話末評語と食い違った方向にしていることを顕著に示す例であると言える。『雑談集』第四巻第六は、説教師がサククラを仕込むのだが、説法が始まる前にそのサククラが泣いてしまったことよってそのこ

とが暴露されたという笑話であるが、その話末評語には「十悪」や「慚愧」といった語が見られるのである。『雑談集』は梵舜本巻第六と全く同じ説教師の説法での失敗談を載せながらも、評語から仏教的見地に持っっているからなのである。

この様に、梵舜本後半部の独自笑話での話末評語は、あまりにも諸本共通笑話等との評語関心とは違いすぎるのである。例外として梵舜本巻第八（一一）や（一七）第一話の評語を教理的叙述と考えると、残る多くの梵舜本独自笑話の話末評語はどうしても同一人物の手によるものとは考えられないのである。同時に梵舜本が草稿本でないのならば無住の中でそういった思想的变化は起こり得ないのである。

2. 笑話の型

無住笑話の基本形として話末評語での仏教意識が見られることは三―一で述べたが、他にも無住笑話の基本形として考えられる特徴が存在する。その端緒となってくるのが笑話の型である。無住笑話の型として挙げられるのは、僧に準ずる者が登場することである。

この点については既にこれまでの研究においても数多く述べられているので、具体例は割愛するが、とにかく僧に準ずる者を無住は笑う。巻第五本の動物の笑い二話と五末の笑いの歌二話を例外として除けば、流布本系統において僧が登場しない笑話は三十六話中五話

しか見られない。『雑談集』においても三十三話中八話である。これらの数値は全巻を通してのものである。対して、梵舜本巻第八話自笑話においては、六話に僧が全く登場しない。「姫君」「殿居番」「判官代」「勢小キ男」「或番匠ガ子息の童」「彌太郎ト云船人」が主人公（笑いの対象）となるのだが、一つの巻に多くの笑話が載せられ、その笑話にこれ程僧に準じない多種多様な者が登場し、内容面においても仏教色が弱い巻は他になく、無住笑話の型として特異と言わざるを得ない。巻第八（一一）から（二〇）へと続く梵舜本独自笑話の中には、無住笑話の型から大きく逸脱した主人公の笑いが見られるのは重要である。また、梵舜本独自笑話には特に卑俗な表現、直接的な表現が見られることも無住笑話の型と乖離している。例えば、巻第六には「シッ」や「下風」、巻第八には「ユバリ」や「屎」といった語が用いられているが、無住笑話の卑俗性は、これらの梵舜本独自笑話の直接的な表現を受けて言われてきたものであると考えられる。つまり、梵舜本独自笑話を除けば、無住笑話の卑俗性は極端に下がるのである。山伏を「ビリ屎」と評した話がわずかに存在するが、これはあくまで山伏を論ずる為に用いられた喩えであり、米沢本から流布本系統への移行の中で、この一文でさえ削除されている。直接的な表現そのものが笑いの対象となっている梵舜本独自笑話は、やはり無住笑話の型としてふさわしくないのである。

梵舜本『沙石集』の性格

但し、梵舜本独自笑話に、無住が好んだ表現の一つとも考えられる興ある者という意味の「魂魄」が用いられていることについては改めて考えなければならぬ。

四、おわりに

梵舜本が『沙石集』草稿本でなく、笑話の話末評語や型から無住改稿本とするにも不自然である可能性が高いとすると、現在の梵舜本本文はどういった場で形成されたのであろうか。『沙石集』巻第八には、米沢本、梵舜本共通説話として次の様なものが見られる。

尾州ニ或ル山寺法師ハ、駄ハモチニクシ、雄馬ニカヘントテ、又駄ニライヲウチテカヘタル事有リ、（米沢本）

尾州ニ或山寺法師、駄ヲモチタルヲ、駄ハモチニクシ、雄馬ニカウベシトテ、下津ノ市ニ行ケル道ニテ、我駄ヨリモヲトリタリケレドモ、雄馬ナレバト思テ、モガヘニシテカヘリケリ。弟子ナリケル俗、ワイ／＼行ケルガ道ニテ行逢ヌ。「駄ヲコソ雄馬ニ替ヘタリ」云。弟子ノ俗見レバ、是モ駄ナリケリ。「駄ニテ候」ト云ヘバ、「ヨモ」ト云。「御覧候へ。慥ニ駄ニテ候」ト云ヘバ、馬ヨリヲリテ立廻テ見ルニ駄也。実ニ心地アリゲナル気色ニテ、「アラテニマカレ」トゾ乗ニケル。馬ノ咎可レ有共ヲボヘズ。アワレ馬ノ物云事ナラバ、「御房ノ目クラ、我ヲバ

ナニトモ云給へ」ト、云テマシトコソヲボユレ。(梵舜本)

同じ説話を載せながら、米沢本と梵舜本の簡潔・詳細の関係が際立つ例である両本のこの関係は他にも認められ、これが米沢本、梵舜本の持つ特質を端的に表すと考える。つまり、できるだけ話の枠組みだけを伝えることに終始徹する米沢本はいわば説教台本(説草)的な要素を持つのに対し、笑話的要素を多く取り入れ詳細且つ実録的な本文内容を有する梵舜本は民間的な説教や唱導の場と関係していた人物(もしくは人物達)が改変を行った可能性を視野に入れるべきではないだろうか。あるいは笑話的要素が強すぎるといった点では、説教や唱導の場とはそれ程強い関連性を持たない人物だったかもしれない。いづれにしても、その人物は仏教的な思想を肯定しながら、それ以上に物語、特に笑話というものに強い関心を持った人物であったと考えられる。但し、『金玉要集』が梵舜本と密接なつながりを持っている可能性が高いことや、梵舜本と『直談因縁集』のみに伝わる説話に詳細・簡潔の関係が認められること等から梵舜本の性格とその筆者について早急に結論を出すのは危険である。梵舜本改変が梵舜の手によるものである可能性も含めて慎重に検討する必要があると思われる。

以上、梵舜本の持つ性格について考えてきたが、梵舜本は『沙石集』の草稿本とも無住の改稿本とも考えにくく、米沢本から流布本

系統への無住自身の『沙石集』創作、改稿過程の一環に入れるべき伝本ではないと考える。その本文特性から、梵舜本の成立に大きく関わった人物として無住と同様、いやそれ以上に物語、笑話を愛好する者が関わったと考えられるのではないか。今後は、梵舜本の性格とその筆者について、さらに考察を進めていきたい。その中で米沢本の性格についても検討を続け、梵舜本と江戸初期本を含めた『沙石集』諸本の位置関係についても、より明確にしたい。

注

- ① 例えば現在、無住自身の改稿として判明しているのは、永仁三年(一二九五)十一月二十五日の改稿や、徳治三年(一一三〇八)五月二十一日の改稿等が挙げられる。無住は裏書の加筆修正も積極的に行っている。
- ② 『沙石集』諸本関係については、渡邊氏の『日本古典文学大系『沙石集』』(岩波書店、一九七六年)「解説」の分類に従った。それを基本として小島氏が新編『日本古典文学全集『沙石集』』(小学館、二〇〇一年)「解説」において、渡邊氏の分類を補足した(『沙石集』新出本等を新たに加えた)ものも参照した。
- ③ 渡邊氏「国語と国文学」十八—十九(一九四二年十月)
- ④ 渡邊氏『日本古典文学大系『沙石集』』(岩波書店、一九七六年)
- ⑤ 土屋氏「梵舜本『沙石集』考—増補本としての可能性—」(『中世文学』第五十号、二〇〇五年六月)
- ⑥ 小島氏『新編日本古典文学全集『沙石集』』(小学館、二〇〇一年)
- ⑦ 注④に同じ。

- ⑧ 渡邊氏『廣本沙石集』（日本書房、一九四三年）
- ⑨ 深井一郎氏『慶長十年古活字本沙石集総索引―影印篇―』（勉誠社、一九八〇年）
- ⑩ 分類において対象とする用例は、梵舜本、米沢本、慶長十年本の同一説話内ものに限定した。同一説話内というのは、『沙石集』の中で、三本に共通した説話を有する部分を指す。
- ⑪ 数字は記述の付加を示し、付加が多ければ高い数値となる。
- ⑫ 繰り返し表現 梵舜本四十三例 米沢本二十三例 慶長十年本二十八例
- 見聞強調表現 梵舜本十五例 米沢本十一例 慶長十年本五例
- 教理的叙述 梵舜本三十七例 米沢本十九例 慶長十年本四十七例
- 話末評語 梵舜本十一例 米沢本二例 慶長十年本八例
- 名詞その他 梵舜本七十二例 米沢本二十二例 慶長十年本七十三例
- ⑬ 久曾神昇氏『沙石集（一）』（汲古書院、一九七三年）
- ⑭ 北野克氏『元応本沙石集』（汲古書院、一九八〇年）
- ⑮ 藤井隆氏『沙石集（二）』（汲古書院、一九七三年）
- ⑯ 土屋氏『内閣文庫蔵『沙石集』翻刻と研究』（笠間書院、二〇〇三年）
- ⑰ 筑土鈴寛氏『沙石集』（岩波文庫、一九四三年）
- ⑱ 繰り返し表現 梵舜本三十例 米沢本十六例 慶長十年本二十七例
- 見聞強調表現 梵舜本八例 米沢本一例 慶長十年本七例
- 教理的叙述 梵舜本二十四例 米沢本四例 慶長十年本二十三例
- 話末評語 梵舜本十一例 米沢本一例 慶長十年本八例
- 名詞その他 梵舜本四十六例 米沢本十四例 慶長十年本四十六例
- ⑲ 梵舜本の後半部や米沢本に存在する多くの笑話が、流布本系統では削除されている。しかし古本系統に存在しなかった笑話が流布本系統に付加されているということはないのである。

梵舜本『沙石集』の性格

- ⑲ 山田昭全氏、三木紀人氏『雑談集』（三弥井書店、一九七三年）
- ⑳ 梵舜本、米沢本共通笑話の話末評語では巻第六（一）に「余二委キ施主分カハユクゴソ」。（米沢本では「施主分也」といった例外的な話末評語も認められる。）
- ㉑ 『金玉要集』の用いた『沙石集』が梵舜本の形態に近いものであった可能性については近本謙介氏の「唱導の文の集成―内閣文庫蔵『金玉要集』について―」（『伝承文学研究』第五十三号、二〇〇四年三月）に詳しい。
- ㉒ 梵舜本と『直談因縁集』のみに伝わる説話に詳細・簡潔の関係が認められることについては、例えば、梵舜本巻第六（二三）『説法セズシテ布施取タル事』一話、二話と『直談因縁集』三巻の十七話、三十五話とがそれに当たる。なお、『直談因縁集』については、阿部泰郎氏、小林直樹氏、田中貫子氏、近本氏、廣田哲通氏の日光天海蔵『直談因縁集翻刻と索引』（和泉書院、一九九八年）を参照した。
- ㉓ 『沙石集』諸本の中で、唯一巻第八に梵舜本と同じ構成、本文内容を持つ新出の御茶ノ水図書館蔵成實堂文庫旧蔵江戸初期本の存在についても考えなければならない。

付記

本稿は、説話文学会 平成十八年度大会（平成十八年六月十八日、仏教大学紫野キャンパス・成徳常照館）において発表した「梵舜本『沙石集』の性格と成立」をもとにして成ったものである。発表の席上、ご教示を賜った小林直樹氏、荒木浩氏、近本謙介氏をはじめ、会員の諸先生に御礼を申し上げます。